

令和2年度(2020年度) 大阪暁光高等学校 学校評価

1. めざす学校像

学校法人千代田学園の始まりは、真言宗盛松寺住職の故高橋道雄師が、第二次世界大戦後の荒んだ世相を憂いて、庶民のために学問所を開いた弘法大師空海(774-835年)の偉業に倣い、1950年に千代田高等学校、附属幼稚園を開設したところに遡る。弘法大師は、身分や貧富にかかわらずなく門戸を広く庶民に開放し、あらゆる思想・学芸を総合的に学ぶことができる私立学校「綜芸種智院」を創設(829年)し、そこで多くの前途有為な青年を育てようとした。本学園は、この精神を受け継いでいる。

「人間教育」を建学の精神として、若い世代に豊かな人間性を培うとともに、平和で民主的な社会の形成者として必要な知識、教養と、それに基づいた技術を教授することにより、社会や地域を支え、また支えられる人間を育成することを基本的な考え方としている。その具現化として、本校は、社会的共通基盤を担う教育、福祉、医療など対人援助職の分野を指向する若人を輩出する学園づくりを大きな社会的ミッションとしている。本校は、これまで積み上げてきた一人ひとりが自らの人生の主人公として生きる力(主権者教育)の成果を土台としつつ、志や目標を持って入学してきた生徒とその保護者の期待に応えていくための教育の創造に全力で取り組んでいく。

2. 中期的目標

1. 「人間教育」を理念とする普通科の魅力を生み出す教育実践を行う。
 - (1) 普通科の新コースである教育探究コース、幼児教育コースの教育内容を完成させていく。
 - (2) 「わかる授業」「深く考え参加する授業」の実現に向けて授業改革をすすめていく。
 - (3) 特別活動を教育活動にしっかり位置づけ、自治の力を育てていく。
 - (4) 社会的モラルを培い民主的な人格の形成につながる生活指導をすすめていく。
 - (5) 特別支援教育を充実させ、特別なニーズを持つ生徒をサポートしていく。
 - (6) 生徒の発達可能性を信じて諦めない指導を続け、退学者を減らしていく。
2. 系統的なキャリア教育を推進し、全ての生徒が卒業後の進路決定をできるようにする。
 - (1) 1年次は“職業”、2年次は“学問”をテーマに卒業後のキャリアを考えさせていく。
 - (2) 年間教育活動の中で、進路実現につながる多様なサポートをすすめていく。
 - (3) 併設短大への内部進学希望者を増やす。
3. 基礎的な理論・技術と患者一人ひとりをかけがえのない存在として捉えられる看護師を育成する。
 - (1) 命と向き合う職業に就く者としての自覚と誇りを育てていく。
 - (2) 看護専門科目と普通科目を共に重視し、基礎学力の向上を諮っていく。
 - (3) 将来、医療現場でチームとして働くことを考え、チームで責任を果たせる力をつけていく。
 - (4) 就職活動、臨地実習、国家試験の受験学習を両立して取り寄せ、国家試験100%合格をめざす。
4. 高校を支える諸組織や地域との連携を強め、地域社会に貢献する。
5. 部活動を活性化させていく

《学校アンケートについて》

教育活動の現状や問題点を確認・点検し、教育改善のための方策を明らかにする目的で、学校アンケートを平成2年(2020年)2月に実施した。

アンケートは、【A.そう思う、B.どちらかと言えばそう思う、C.どちらかと言えばそう思わない、D.そう思わない、E.わからない】の5択である。下記の%数値は、「A.そう思う」「B.どちらかと言えばそう思う」を合算したものである。

3. 学校関係者評価

【実施評価委員会】

委員長 石井雅彦(教育アドバイザー)

評価委員 大倉結(評議員) 長田美穂(PTA会長) 葛目巳恵子(同窓会会長) 玉崎和実(地元自治会長) 福井雅英(教育探究コース特別講師)

- [1] 学校教育全般の評価
 - * 「入学してよかった」との回答は、在校生74.5%、保護者86.0%となっており、学校への満足度はおおむね高く、改善傾向がみられる。しかし、見方を変えると生徒4人に1人が異なる思いを持っており、深堀が必要である。
 - * 評価が高いのは、教育課程と施設・設備の項目である。看護科、教探、幼教の「特色ある授業が行われている」は在校生89.5%、保護者89.0%、「トイレや階段などの校内美化が、行き届いている」は、在校生91.3%となっている。
 - * 近年の堅調な生徒募集は、このような学校への評価の向上が背景となっていると考えられる。
- [2] 学習指導
 - * 「わかりやすい授業が展開されている」は、71.7%であるものの、「授業中深く考えたり、意見を述べたりする機会がある」は60.1%、「学力がついたと実感できる」は57.5%となっている。「思考力・判断力・表現力等」を育成する授業への一層の転換が求められている。
 - * 「自分から勉強しようとする思いが大きくなった」65.1%のきっかけとして、「KG・充実ノート」「放課後学習会」をあげた生徒が半数以上を占め、本校の特色ある取り組みが、成果をあげている。
 - * 一方、学習規律については、「授業時間と休憩時間のメリハリがある」48.4%、「授業妨害を先生がしっかり指導している」54.0%となっており、課題である。
- [3] 人権・生活指導
 - * 「命や人権を尊重し、差別を許さない教育が行われている」は71.2%であるものの、「暴力問題やいじめが起きた時に適切な指導が行われている」は55.3%であり、引き続き事象発生時の迅速で組織的な対応が課題である。
 - * この1年間で「いじめを受けている人がいた」の項目では、9.9%が「はい」と答えている。いじめがあることを前提に、早期発見に努める必要がある。
- [4] 特別活動・課外活動
 - * 「行事は、生徒が楽しく参加できるものになっている」77.1%、クラブ活動は「キャプテンや部長中心に生徒が運営できている」78.5%となっており、生徒の主体性が発揮されている。
 - * 「希望する進路を実現するため丁寧な指導がされている」63.3%をはじめ、進路に関する項目は改善傾向がみられる。

[5]その他

*アンケート結果は、学級ごとに集計されており、多くの項目で担任による指導の違いが結果となって現れている。担任の個性や指導力の違いがあることを前提として、学年・コースとしての組織的対応や今年度導入した副担任制の効果的な運用が望まれる。

4. 本年度の取り組み 及び 自己評価

	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価の指標	総括・自己評価
1 普通科の魅力を創出する人間教育の前進	(1)開設4年目の教育探究コースと幼児教育コースの充実を語る。	<p>《教育探究コース》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動的な授業を年20回以上実施 ・調査研究活動を年70時間以上実施 ・プレゼンテーションを年10回以上実施 <p>《幼児教育コース》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼児教育コースコーディネータの招聘 ・保育実習を年6回以上実施 ・高短連携授業の充実 ・保育ボランティアを年2回以上実施 ・保育検定の実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校アンケート ・特色あるカリキュラムの実施回数 	<p>《教育探究コース》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動的な授業を年69回以上実施、調査研究活動を年182時間以上実施、プレゼンテーションを年49回以上実施。 ・コロナ禍でフィールドワークが制限され、高野山合宿、楠小学校訪問、ニュージーランド研修が実施できなかったが、「特色ある授業が行われている」が88.9%とコースに対する満足度は高い。 ・「教育人間探究の時間」において、自己探究・地域探究・教育人間探究を柱に、たくさんの「ヒト・モノ・コト」に出会わせながら「学びを自己との往還」を重ねた。プレゼンテーション等を通して探究的なスキルも身に付けてきた。 ・大阪千代田短期大学の敷地内に2021年度開設予定の高野山大学文学部教育学科と連携した7年一貫の教員養成プログラムを研究していく。 <p>《幼児教育コース》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍で保育実習や保育ボランティアを全く実施できず「園児と関わりたい」という要求に充分応えることができなかったが、「特色ある授業が行われている」が88.5%とコースに対する満足度は高い。 ・「保育者のこころ」と人権思想に裏付けられた子ども観を持つ保育者を育てるために、基礎学力の育成に力を入れ、特別活動に積極的に取り組ませた。 ・幼児教育コーディネーターを招聘し、「保育実習演習」や高短連携授業の充実を図ることができた。 ・保育者以外の進路を選択した生徒に対する幼児教育専門科目の指導に課題を残した。(ピアノや高短連携授業) ・保育検定は体制を整えられず、実施できなかった。
	(2)「わかる授業」「深く考え参加する授業」の実現に向けて授業改革をすすめる	<ul style="list-style-type: none"> ・教科会議の定例化と実践交流 ・公開授業の定例化 ・夏期校内研究会での教育実践の交流 ・新教育課程の策定に向け「新教育課程づくり委員会」で議論 ・ICT教育係の立ち上げ、ICT教育環境整備と実践研究 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校アンケート ・生徒からの意見や要望 ・生徒総会に出された要求 	<ul style="list-style-type: none"> ・「わかりやすい授業が展開されている」は71.7%だが、「授業中深く考えたり意見を述べたりする機会がある」は60.1%、「学力がついたと実感できる」は57.5%と高くない。「思考力・判断力・表現力」を育成する授業への一層の転換が求められている。 ・週1回の教科会議を定例化し、生徒の現状分析と実践交流をおこなうことができた。 ・ICT教育係を新設し、オンライン授業、オンラインHRの研究をすすめ、先行実践をつくることができた。コロナ禍の学習保障としてオンラインの課題配信をおこなった。 ・公開授業を2回実施。教科の枠を超えてオープンに学び合えた。 ・コロナ禍の授業時間数確保のため、夏期教育研究会の実施を見送った。 ・2022年度実施の新学習指導要領と学校週5日制に対応する教育課程づくりを進めた。
	(3)特別活動を教育活動の中にしっかりと位置づけ、自治の力を育む。	<ul style="list-style-type: none"> ・実行委員会等を組織し、生徒中心に行事を運営 ・行事や生徒会活動で全校集団づくりを推進 ・月曜放課後のHR活動活用 ・家庭学習週間、放課後学習会をクラス活動として展開 ・生徒会議案書討議の活性化 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校アンケート 	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍で体育大会、修学旅行を中止せざるを得なかったが、文化祭は生徒実行委員会を組織し「コロナ禍で何ができるか」を相談しながら進めた。野外ステージを設けることで発表機会を保障した。「学ぶ文化祭」で外部講師の講演やフィールドワーク等を実施し、視野を広げることができた。 ・「行事は生徒が楽しく参加できるものになっている」が77.1%と、コロナ禍にもかかわらず向上した。 ・全校集団づくりの一環として縦割り充実ノート学習会を実施。3年生が自信と成長感を持った。 ・「生徒会活動やクラス活動は生徒主体の活動になっている」は63.6%で、さらに高めていく必要がある。 ・テスト前の放課後学習会を全てのクラスで実施できた。50%を超える生徒が、学習意欲向上のきっかけとしてKG・充実ノート、放課後学習会をあげている。 ・「家庭学習週間」に約60%以上の生徒が参加することができている。クラス活動として展開する点で課題を残している。 ・HR活動として位置付けている月曜放課後を十分活用できていないクラスが存在した。 ・生徒総会において、すべての全クラスが施設設備と授業に対する要求を提出し、要求実現運動に取り組めた。
	(4)社会的モラルを培い民主的な人格の形成につながる生活指導をすすめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の行動の背景を掴みながら指導 ・遅刻欠席指導での家庭との連携強化 ・スマホ・マナーについてHRで考えさせて指導 ・学期始め・定期考査前の頭髪指導 ・学期に1度の1日玄関指導 ・生活指導を業務とする常勤講師の雇用 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校アンケート 	<ul style="list-style-type: none"> ・長期に渡る全国一斉休校が、生徒の精神面や生活基本的生活習慣に大きな影響を与える中、個々の状況をしっかりと掴み支えていく方針を持って指導に臨んだ。 ・進学総合コースで遅刻10名以上のクラスが2桁近くあった。生活の実態調査を踏まえた分析が必要である。 ・保護者には、日々の連絡と月末ハガキで通知しているが、さらに連絡を密にとっていく必要がある。 ・頭髪指導は、再登校指導の方針を持ち、保護者の協力も得て違反が減らすことができた。 ・生活指導を主たる業務とする常勤講師の配置が効果を上げている。 ・コロナ禍のため1日玄関指導は実施できなかった。 ・「校則違反や学校生活のルールについて適切に指導がおこなわれている」は60.3%「授業時間と休憩時間のメリハリがある」が48.4%、「授業を妨害する行動に対して先生がしっかりと指導している」が54.0%と低い。学習規律の確立が課題である。 ・スマホ指導が不十分であった。スマホ、マナーについて考えるHR

				<p>は持つことができなかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「命や人権を尊重し差別を許さない教育が行われている」は71.2%であるものの、「暴力問題やいじめが起きた時に適切な指導が行われている」は55.3%であり、迅速で組織的な対応が課題である。 「この1年間でいじめを受けている人がいた」が9.9%あった。いじめが存在することを前提に、早期発見に努める必要がある。 教師が生徒としっかり対話し、問題行動の背景を掴み、生徒自身の課題と向き合える指導をすすめられるよう、研修を実施していく。
	<p>(5) 特別支援教育を充実させ、特別なニーズを持つ生徒をサポートしていく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 各学年の構成員で組織された特別支援係会議の週1回の定例化 必要に応じたケース会議と外部機関との連携 良好な人間関係を結べない生徒のための空間づくり 学習支援が必要な生徒のための担当者配置 年2回以上の教員の研修会 	<ul style="list-style-type: none"> 会議・学習会実施状況 	<ul style="list-style-type: none"> 「必要に応じて保健室やカウンセリングの先生に相談ができる」は65.0%、さらに生徒が安心して過ごすことができる環境を作っていく必要がある。 特別支援コーディネーターの下に週1回のペースで特別支援係会議を持った。支援が必要な生徒の情報を共有することで、こぼれ落ちていく生徒を減らすことができた。 25人の生徒のケース会議を持ち、支援が必要な生徒への見方を一致させ指導した。 良好な人間関係を結べずに苦しんでいる生徒が、安心して自分を出せる「居場所カフェ」を週1回のペースで開催し効果をあげた。 学習支援担当教員を雇用し教室に入れない生徒をサポートした。 支援が必要な生徒や、専門機関に繋ぐ必要がある生徒の増加に対応するため、スーパーバイザーの招聘を進める。 6月と12月に他校の取り組みと「WISCIV」について学ぶ研修会をそれぞれ開催した。
	<p>(6) 生徒の発達の可能性を信じ、諦めない指導を続け、退学者減らしていく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 生徒に寄り添う丁寧な指導 保護者との日常的な共同 転退学者率を5%以内 経験の浅い教員をサポート体制 	<ul style="list-style-type: none"> 転退学者数 	<ul style="list-style-type: none"> 専攻科を含む転退学者率3.5%、看護専攻科を含まない転退学者率3.4%と昨年度から若干増えている。 経験の浅い教員をサポートする体制を作り三者面談を実施した。10年スパンで見ると転退学者が大きく減少している。「生きたい学校づくり」を目指した改革の成果が現れている。
2	<p>系統的なキャリア教育を推進し、全ての生徒が卒業後の進路決定をできるようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 学年に応じたキャリア教育の推進 基礎学力の向上 生徒全員の進路決定 看護系進学者の個別指導 検定試験での資格取得 	<ul style="list-style-type: none"> 進路状況 資格検定者数 	<ul style="list-style-type: none"> 「卒業後の進路を考える機会が1年生からつくられている」が61.3%、「希望する進路を実現するための指導が丁寧におこなわれている」が63.3%、「進路について悩んだ時に安心して先生に相談することができる」が63.5%である。 1年生対象に職業ガイダンス、2年生対象に学問ガイダンスを実施。進路に対する意識を高めた。3年は進路部と担任が連携して、きめ細やかな指導をおこなった。1・2年生でのキャリア教育が課題である。 国数英の教科で進路講習を実施。参加者は意欲を持って学んだ。 二次募集も含めると33名の希望者全員が就職内定した。就職希望者に対する基礎力、コミュニケーション能力の育成が課題として見えてきた。 進学総合コースで看護医療系の選択科目を2年生で2単位、3年生で4単位設定。受験先の分析をおこない、一人ひとりに合わせた個人指導を放課後おこない、看護系希望者13名を合格させることができた。 約40名が英検を受験。努力が結果として現れ、達成感を持つことができた。
3	<p>基礎的な理論・技術と患者一人ひとりをかけがえのない存在として捉えられる看護師を育成する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 命と向き合う専門職としての自覚と誇りの育成 高校3年間の基礎学力の向上 臨地実習での指導者・患者からの学びの充実 チーム責任を果たすことができる力の育成 看護専攻科における就職活動、臨地実習と国家試験対策の両立 国家試験合格100% 	<ul style="list-style-type: none"> 学校アンケート 国家試験合格率 	<ul style="list-style-type: none"> コロナ禍で臨地実習を殆ど実施することができず、学内実習に切り替えて実施。事例からのアセスメントや援助の学習は深くできたが、コミュニケーションのとり方や患者情報の集め方には限界があった。臨地での学びの保障が課題である。 臨地実習と両立しながら、自分の行きたい病院検索、説明会参加など主体的に行動でき、全員が病院に就職できた。 実習日程変更や合宿中止による国家試験対策の遅れがあったが、12月中旬には遅れを克服し、活発な学び教え合いがおこなわれるようになった。 在校生1名、既卒生1名が不合格で合格率は98.3%。4年間の平均合格率は99%となる。 高校での3年間、専門科目の学びに対しては熱心だが、他教科の学習や読書等、幅広い学びが弱い。長期休暇の課題も含めて考えていく必要がある。
4	<p>地域の諸組織との連携を強める</p>	<ul style="list-style-type: none"> 敬老会の協力を得た看護科「老年看護」実習の実施 地域全育成会、防災訓練、文化行事、美化活動への参加 敬老会への慰問ボランティア 地域中学校の部活大会の開催 	<ul style="list-style-type: none"> 参加回数 参加生徒の声、地域団体からの意見 	<ul style="list-style-type: none"> コロナ禍で地域の取り組みが殆ど実施されず、会議への参加にとどまった。
5	<p>クラブ員を増やし部活動を活性化させる</p>	<ul style="list-style-type: none"> 外部指導者の招聘 クラブ顧問会議での活動交流 クラブ活動の目標の明確化 	<ul style="list-style-type: none"> クラブ活動内容 クラブ顧問会議の活動報告 	<ul style="list-style-type: none"> サッカー部、バドミントン部、空手部、ダンス部、吹奏楽部、マンガ研究部の6クラブで外部指導者を招聘した。「顧問の先生やコーチの指導に満足している」が75.0%と満足度も高い。 「キャプテンや部長中心に生徒が運営できている」が78.5%と多くのクラブで生徒中心の運営がおこなえている。 感染症対策で使用できない練習場所が発生し、クラブ員に大きな負担をかけた。